

(別紙の2)

自己評価及び外部評価票

[セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価(事業所記入)	外部評価(評価機関記入)	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている。	運営理念、方針を開示し利用者が安心安全な生活が送れるように努めている。四季折々の草花を手にするなど身近な自然を日々の介護に取り入れたり地域の祭りの際には神社に参拝するなど地域の行事に参加している。	玄関に運営理念と方針を掲げ、朝夕の申し送り時や月一回の職員会に皆で唱和し、理念を共有している。それが家にいるようにくつろいでいる利用者の姿に表れていた。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している。	コロナ禍のため直接中学生との交流はできてはいないが利用者が縫った雑巾を中学生にプレゼントし、お礼にと中学生が作った野菜を届けていただいている。地域の方から野菜を頂いた際にはひも編みで作った農作業用のひもをプレゼントしている。	中学生との交流の話や、近くの神社の神事等で協力しているとの話があり地域の中に自然に溶け込み生活している様子の話が聞けた。コロナ禍で地域の人との交流ができない分、事業所内の桜の花見に地域の方をお誘いするお知らせ等の発信も行っていった。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている。	日頃の利用者と職員の様子をSNSに投稿し認知症に関する理解を深めていただいている。今年度は利用者が作っただるまを地域の事業所に届け事業所や認知症の方の持てる力の理解を深めてもらう予定。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実践、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、その意見をサービス向上に活かしている。	運営推進会議では利用者の生活の様子や活動状況の報告、職員研修の取り組みなどを報告し、意見を頂きサービスや職員の資質向上に生かしている。	地域包括支援センターの所長、地区の会長、民生委員、住民自治協議会会員、家族(都合のつく方全員)、事業所関係者の参加によりコロナ禍ではあったが、感染対策を行い、二カ月に一度開催されていた。会議では、認知症についての勉強会や利用者の移送ケースについての相談等具体的な話し合いがもたれ、細かく議事録が残されていた。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる。	包括支援センター職員に運営推進会議に参加していただき事業所の運営や利用者や職員の活動について毎回意見やアドバイス、指導、提案を頂いている。	運営推進会議に毎回参加しているため、日々の相談等、密に連携が取れている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる。	職員会議では身体拘束についての研修を行い身体拘束についての理解を深めている。玄関の施錠をせず自由に屋外に出られるようにしており、転倒など心配な利用者には付き添い、屋外を歩行するなどしている。	玄関の施錠はしておらず、自由に屋外に行けるようになっている。身体拘束についての職員の理解も深く、日々のケアに活かされている。	

自己	外部	項目	自己評価(事業所記入)	外部評価(評価機関記入)	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内の虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている。	虐待防止について職員研修で学んだり、研修を受けたりして、虐待についての理解を深め、日ごろの介護で虐待の場がないかを確認し、虐待防止に努めている。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している。	権利擁護に関する研修を受け理解を深めている。現在の利用者においては日常生活で自立支援や成年後見制度を必要とする利用者はいないが理解を深め、今後必要な方がいた場合は支援につなげていきたい。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている。	契約に関しては契約書、重要事項説明書に沿って時間をかけ内容を確認しながら説明し、理解していただくようにしている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている。	運営推進会議には利用者家族が運営推進委員として参加し意見を述べている。施設入口に要望箱を設置している。また、職員は一人ひとり担当利用者を受け持ち、家族と電話連絡を取り会話の中から家族の要望や思いを聞くことができている。	コロナ禍であったが、感染状況を見て期間を定め家族の面会を行い、直接利用者や事業所への意見を聞く機会を設けていた。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている。	事業所所長を含め管理者、介護職員で定期的に行われている職員会議やケース検討会で意見交換を行っている。所長会議での運営状況を職員会議で報告し、より良い運営のための意見交換を行っている。	日常的に些細な相談も、管理者と行うことができ、話しやすい雰囲気となっている。また年一回の所長面接もあり、職員の意見が反映される仕組みとなっている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている。	年1回所長面談があり、意見を聞くことができている。所長が月に数回は訪問し職員に声掛けしながら勤務状況の確認を行ったり、管理者に勤務状況の確認を行い労働条件が整うようアドバイスを行っている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている。	質の向上や介護技術の向上などの研修に参加する機会が持てるよう配慮を行っている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている。	同法人内の会議にて意見交換をしたり鬼無里事業所内のセクション会議で各事業所の状況報告や課題解決に向けての検討を行ったりしている。SNSでの広報活動を行い各事業所の活動内容を参考に質の向上を図っている。他の事業所と合同で研修に参加している。		

自己	外部	項目	自己評価(事業所記入)	外部評価(評価機関記入)	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている。	職員一人一人が声掛けをする機会を多く持つようして、本人の生い立ちや生活歴を聞き取り本人が困っていることなどを出来るだけ出していただけるようにしている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている。	生活歴や本人を取り巻く環境、人間関係を家族から聞き取り、サービス導入時の不安や困っていることを自然体で話し出せるような雰囲気作りをして良い関係を築くようにしている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている。	アセスメント段階でまずは本人や家族の思いを聞き取り、以前利用していた担当ケアマネ、サービス担当者や主治医との連携を取り、必要なサービスについて検討するように努めている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている。	それぞれの利用者ペースで本人に残されている力を発揮することができそうな作業と一緒にいき、食事の際には利用者に行けることを行ってもらい、一緒に食事をとりながら暮らしを共にする者同士の関係を築いている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている。	利用者の状況をこまめに連絡し、今後の支援の方向性や支援に対する思いなどを聞いている。必要な受診の付き添いや生活に必要な物品を揃えてもらうよう連絡を取っている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている。	地域の情報番組を見ながら会話し本人の馴染みの場所や人間関係を聞きとっている。コロナ禍で現在は面会外出は中止しているが日ごろは家族の了承を得て、親戚の方等との面会外出が出来るようにしている。電話が来た場合は取次ぎをして馴染みの関係が継続できるようにしている。	コロナ禍で外出が難しかったため、「戸隠鬼無里情報局」という15分番組のテレビを見て、馴染みの場所を思い出し、会話を楽しんでいった。また、受診のついでに家に行く利用者もいた。春には外出の予定を立てているとの話を聞いた。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せず利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている。	対面での座席にすることでお互いの顔を見ながら会話できるようにしている。職員が間に入り作業やレクリエーションを楽しく行えるようにして利用者同士が家族のようにお互いを分かり合い支え合えるように支援している。		

自己	外部	項目	自己評価(事業所記入)	外部評価(評価機関記入)	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている。	退所理由によっては断ち切れとになってしまう人もいるが本人家族が安心して生活できるための必要な情報提供や相談支援を行うよう努めている。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している。	本人との関わりを深めている中で希望や意向を把握し利用者本位を尊重している。本人の意向確認ができないときは場面場面での行動や表情を確認し本人の意向をくみ取るようにしている。	地元の職員が多いため、共通の話題の中から上手く思いを引き出し、実際に漬物をつける作業の支援につなげられた例もある。また意向がわかりにくい利用者については表情や発する単語等から、思いを汲み取り支援している。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている。	本人と会話をしたり家族との面談の際に、改めて生活歴を聞き取ったりすることで、入所前の生活を知り、施設での生活に取り入れられることは取り入れている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている。	集団での1日の生活の流れはあるが、一人一人の生活のペースに合わせて、その時々に合わせて支援を行っている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している。	毎月1回行われるケース検討会では各利用者の担当者を中心に状況報告を行い全職員から意見をもらい支援の方向性を出すようにして介護計画に生かしている。現在は利用者家族から電話連絡や会議開催時に生活に関する意向を確認し、主治医からの意見を取り入れながら行っている。	三カ月に一度プランの見直しを行い、センター方式を利用したアセスメントに基づきプランを立て担当がモニタリングし、ほぼ全員出席の職員会で検討している。やむを得ず出席できない職員には、議事録の提示や日々の申し送り時に伝え共有している。また、家族の意見も十分に聞き取れている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている。	個々の目標が記載された記録用紙に日々の様子やケアについて記入し、朝夕の申し送り時にはさらに詳しく引継ぎを行い、職員全体で利用者の情報共有を行っている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる。	診療所の往診、外出時の移動支援、緊急時の支援等個々の状況に応じ対応をしている。緊急時は同法人の車両で受診することもある。車いすの方の体重測定は同法人の車いす対応体重計のある通所介護で行うこともある。		

自己	外部	項目	自己評価(事業所記入)	外部評価(評価機関記入)	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している。	中学校との交流を行っている。避難訓練時地域住民の協力を受けている。地域でとれる野菜など日々の食事に必要な食材の支援を受けている。コロナ禍ではあるが地域住民との接点を持ち安全に楽しく生活できている。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している。	鬼無里診療所医師による2か月に1回の往診診療の他、急な体調変化時には鬼無里診療所の看護師に相談し、必要により往診を受けている。画像診断で医師と直接相談をして対応している。	入所時にかかりつけ医を確認している。現在は全員鬼無里診療所となっている。また、専門医については、かかりつけ医の紹介状で家族対応の受診を行い詳細を書面にて伝え、事業所と連携が取れている。また緊急時もかかりつけ医と連携が取れる仕組みを作り、支援している。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している。	鬼無里診療所看護師に急な体調の変化について相談したり、社協内の看護師やOT、PTに日ごろの状態について相談し適切な医療を受けられるよう支援を行っている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院時は地域連携室に日ごろの生活の様子など本人の情報を送り、入院中は病院での様子を家族や病棟看護師等と連絡を取り退院に向けての情報交換を行い、可能な限りグループホームでの生活が継続できるよう支援をしている。必要時は病院に訪問し医師と話をしている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる。	入所契約時に重度化や終末期には医療的処置が十分受けられないことを説明した上で、医師から個々に高齢者の身体機能や終末期の心構えなど話をしてもらっている。身体機能が低下した利用者家族にはこまめに状況の連絡を入れ面会してもらい、医師、家族、職員で今後の支援についての検討を重ね、希望に応じ看取りの支援を行っている。	看取りに関する書類が作られており、入所時及び重度化に伴って早い段階で、家族への説明を丁寧に行っている。実際に日々変化する家族の思いに寄り添い、家族、医師、看護師、職員とチームで看取りを支援した話を聞いた。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている。	職員は普通救命救急講習会を受講し救急時の連絡手順や手法を確認している。		

自己	外部	項目	自己評価(事業所記入)	外部評価(評価機関記入)	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている。	地域と協定を結び、年2回避難訓練を実施している。地域住民の応援参加の協力体制を作っている。利用者の居室に身を守るグッズを備えたり居室入口には個人情報カードを備えている。常に職員の連絡網の確認を行っている。	コロナ禍で地域協定を結んだ、地区会長、避難支援員2名の参加はなかったが、年2回の利用者を実際に避難させる訓練と、地域で行う通報訓練に参加している。また各居室に防災頭巾、防寒シート、靴が用意されている。停電に備えて、ランタンやヘッドライトなど照明器具が完備されている。大雪時の避難経路確保のため除雪車を依頼できる協力体制と外に出るための屋根つきのスロープが完備されていた。(ハザードマップによると当事業所は災害の危険が少ない場所である)	
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている。	利用者の生活歴や、人格を尊重し、プライバシーを損なわないよう各職員は意識して言葉かけに気を配りケアに当たっている。ケース検討会では個々の対応について話し合いをしたり個人情報保護についての研修・就業規定等の確認を行っている。	利用者全員同じ地区の住民であるため、親しみを込めて、苗字ではなく名前で呼んでおり、トイレ誘導等も本人だけに分かるよう、小声で心がけている。また、入浴等も肌の露出を避ける工夫を行っている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている。	日常生活の支援に当たっては本人の希望を確認、意向を尊重し同意を得てから実施している。自己表現や自己決定が困難な状況の時は本人の表情を確認しながら、職員の声掛けを工夫している。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している。	日々のレクリエーションや作業など担当職員の計画があり提案を行ってはいるが、本人の希望をお聞きし希望に沿って支援を行っている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している。	定期的に訪問理美容の支援を行ったり、季節を考慮して着心地の良い服を利用者と職員と一緒に選んだり、アドバイスを行っている。男性利用者は毎日髭剃りができるよう支援している。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている。	献立は利用者の意見を取り入れながら、担当職員が立て、職員と利用者が一緒に食事の準備を行っている。衛生面を考慮し、野菜の下ごしらえ、食後のテーブル拭き、トレイ拭き等、個々の好みや能力に応じた活動ができるようにしている。	地域の方から旬の食材をいただいた時は当日の献立を変更して、利用者と新たな献立を決めたり、敬老会、正月、お盆等特別な日には、特別メニューとしてちらし寿司や外注の弁当など日常とは違った食事を提供している。誕生会には手作りケーキを提供している。食事の準備や後片付けは座って野菜の下ごしらえやトレイ拭き、食器拭きなどを職員と行っている。	

自己	外部	項目	自己評価(事業所記入)		外部評価(評価機関記入)	
			実践状況		実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている。	食事量や水分摂取量を毎日記録し観察・考察している。利用者の身体状況に応じ飲み込みの状態に合わせ軟食にしたり、きざみ食にしている。糖尿病のある利用者には診療所医師や看護師よりアドバイスをもらい食事内容や量を検討している。			
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている。	毎食後職員が付き添って各利用者に応じた対応を行っている。週に2回は入れ歯洗浄剤を使用し清潔を保ち肺炎予防に努めている。			
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている。	利用者の排せつ、水分摂取量の把握を行い個々に合った声がけ介助を行っている。夜間の排せつについては状態により声掛け誘導を行っているが、良眠中は適宜行っている。		排泄パターンのチェック記録を確認できた。実際にそれによって失禁が少なくなったケースも聞け、自立に向けた支援を細かく記録することからできている。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる。	1日の食事や水分摂取量を把握し野菜を中心とした食事の提供とともに必要により医師と相談し排便を促す薬を使用し、排便の管理を行っている。トイレまでの移動が困難な利用者についても訴えがあればトイレに誘導し排せつしやすい環境を作っている。			
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている。	体調と本人の希望を確認した上で、入浴してもらっている。バイタルチェックの数値や本人の訴えを基準に行っている。本人の気が進まない時には時間を変えたり曜日を変え本人の意向に沿って入浴できるように声掛け配慮を行っている。		基本週二回の入浴ではあるが、本人の意向に合わせて、時間や曜日をずらし入浴することができている。また季節風呂等を今後行っていきたいとの話もあった。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している。	利用者個々の生活リズムを把握し、休息を取れるように努めている。日中のレクリエーションや作業を行うことで適度な運動、適度な疲労感から安眠できるように努めている。			
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている。	職員は服薬の目的や内容について理解している。薬の変更時や単発の処方についてはミーティングで報告、共有し、状態の変化を把握して主治医に報告・相談している。			
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている。	日常生活の中で本人ができること興味のあることを常に把握し、入所前から続けてきたことなどを見つけ、本人の役割として声掛けを行っている。職員が付いて車いすを押す、トレイ拭き、テーブル拭き、花を生けるなど本人の能力、興味に合わせて支援を行っている。			

自己	外部	項目	自己評価(事業所記入)	外部評価(評価機関記入)	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している。	今年度は新型コロナ感染防止のため外出支援はできなかったが施設外に出て運動の機会を持ったり、地域の神社のお祭りには参拝ができるよう支援を行っている。必要な病院受診は家族の協力を得ている。地域の移動支援の利用ができるよう支援している。日用品の必要な物の買い物支援を行っている。	感染対策をして、ドライブがてら利用者と日用品の買い物に出かけたり、家族の協力を得て、家に行ったり、隣の神社のお祭りに参加する等、コロナ禍ではあったができるだけ工夫して、外出支援を行っていた。	
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している。	本人のお小遣いとして預り金を預かっている。利用者によっては外出時に欲しいものを買うことができている。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている。	家族からの電話の取次ぎをしたり電話をかけた希望のある時には対応している。本人の写真を載せた便箋を用意し季節の手紙を送るなどの支援を行っている。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている。	施設居間のスペースには利用者と職員が一緒に壁面を飾ったり、観葉植物や利用者の生けた花を置き季節感を味わいながら穏やかに過ごすことができるようにしている。日中はすりガラスを開け透明ガラスから日が差し込む様子や屋外の様子を見られるようにしている。	リビングには大きな窓があり、四季折々の景色が見える。壁には、利用者と職員とで作った大きな壁画が何枚も飾られていた。厨房も見えるところにあり、音やにおいを感じられる作りになっていた。また、フローリングと畳とに分かれており、大家族と一緒に生活しているような場を感じられた。テーブルには作りかけの作品も置かれていた。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている。	共有スペースにはソファやテーブルを設置し利用者同士で談笑したり、一人で静かに過ごすことができるようにしている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている。	居室には使い慣れた家具・電化製品や寝具を使用することで、安心し気持ちよく過ごせるようにしている。家族の写真や本人の写真や置き、本人が作成した装飾品を置くなどして個性ある空間を作っている。必要に応じてベッドの使用や手すりの設置をして転倒防止を行っている。	大きな収納があり、使いやすく整然としていた。使い慣れた家具や家族写真、位牌、テレビ、自作の作品などが置かれており、部屋全体が明るく落ち着ける空間となっていた。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している。	居室の入り口には名前のプレートがあり、自分自身の名前を確認できるようにしている。施設内のところどころに案内表示して不安や混乱を避けるように工夫をしている。持ち物には記名をして扱いやすいようにしている。		